

潜在的な宗教観が生む日本の推し文化

林真央

若い世代の御朱印巡りや神社巡りが注目を浴びているが、無意識に神仏に手を合わせる行為が見られる一方で、日本人の信仰的宗教は意識されていない。しかし、現在活性化している「推し」文化に目を向けると、「推し活」の内容には宗教用語や宗教を想起させる行動が多く目立つ。そこで、本論文では、神社との近さと推し活に関するアンケート調査を行い、神社との関わりと推し活の内容から、潜在的な宗教意識と日本の「推し」文化の関わりについて明らかにする。

まず、生活の中の神道・日本のコンテンツから分かる神道の特徴と日本の宗教観・推し文化からみた偶像崇拜の3つの観点から日本の宗教観と推し文化の関係性を巡る先行研究を行った。

日本人固有の宗教である神道は、宗教的信仰として認識されることは少ないが、「万物に靈魂が宿る」というアニミズム的な考え方を日本人は当たり前享受している。アニミズム的に万物をめ、「かわいい」「萌える」「推し」という感情を生み出し、今日のおタク文化や推し文化を形成した。これらは日本特有の潜在的な宗教観が生んだ新しい偶像崇拜の形であり、それらに伴う行動いわば「推し活」は新たな宗教活動の一種とも考えられる。

次に、御朱印ブームや多様化する聖地巡礼ブームに目を向けると、自らの趣味嗜好に合わせて新しい宗教的イメージや実践を作り出した結果、聖なるものが観光のコンテンツに、宗教が新たな形に生まれ変わっていた。そして、推し活グッズで推しを華やかに飾り、推しを模したグッズを命が宿ったように大事に愛で尊ぶ行為は神道が持つアニミズムの由縁だといえる。

さらに、筆者と同世代の大学生に注目し、若者の神社の関わりや宗教的行動から「推し」に対する行動との関連性を検討する目的で、神社の近さと推し活に関するアンケート調査を実施した。

日本人の信仰的宗教は意識されなかったが、神社との関わりの中で潜在的に神の存在を意識しており、生活の中に深く神社が根付いていることがわかった。そして、「推し活」の内容をみると、キャラクターや人物を「推し＝神」と称し愛でるその行為は、1000年以上前から自然の美しさを尊ぶ行為と等しく、万物に神が宿るアニミズムの思想が反映されたものであることが明らかとなった。